
魔導戦記リリカルなのはStratoS

杉並

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔導戦記リリカルなのはStratos

【Nコード】

N2552BA

【作者名】

杉並

【あらすじ】

3年前の第2回IS世界大会モンド・グロツソ、織斑千冬は弟の一夏よりも「ブリュンヒルデ」という称号、栄誉を優先した。絶望する一夏だったが、彼は別の青年に助けられそして自らの意志で別の道を進むことを決意しこの世界を離れた。3年後に戻ってきた彼の目に自らの生まれ故郷はどのように映るのだろうか…

魔導戦記リリカルなのはStratos、始まります。

この物語を読んでいる途中で違和感を感じる方も出てくると思いますが、それはこの物語に私の個人的な考えや設定等が含まれているために起こっていると考えられます。大変申し訳ないのですが、予めその点をご理解していただけたらと思っております。

第1話「出会い」（前書き）

読切り累計アクセス数が1000を超え、ストーリーの方も少しずつですが出来上がってきたので、このたび連載することを決意しました。

更新は最低でも週1のペースを崩さずにやっていけたらと思っています。

第1話は読切りと変わっていないので、すでに読んだ方は第2話からお進みください。

それでは本編の方へ

その出会いがなければ…あの手を掴まなければ…俺はこの世界で何も知らず、ただ世界に流されて生きていたのかもしれない。だけど俺はその手を掴んだ。今の自分を変えたいと思ったから。選んだ道がどんなに辛くて苦しくても俺は進み続ける…それは自分で進むと決めた道だから。

魔導戦記リリカルなのはStratos 第1話「出会い」、始まります。

第1話「出会い」

結局、自らの姉は俺を助けには来なかった。彼女は9つ下の弟の命よりも「ブリュンヒルデ」という称号、榮譽を優先したのだ。

薄汚れた廃工場の柱の1つに縛り付けられながら少年は絶望した。

——お前の家族は私だけだ——

両親が消えた時に姉が俺に言い聞かせた言葉が思い出された。あの言葉は嘘だったのか。俺はその言葉を信じて今まで生活してきた。わがままも言わず、姉の不慣れな家事も全部担当してきた。なのに、それさえも否定されたように思えた。

そんな時だった。青白く光る閃光が壁を打ち抜き、俺の周りにいた数人の誘拐犯を吹き飛ばしたのだ。

壁を打ち抜いて廃工場の中に入ってきたのは青のラインが所々に入っていた白い服を身に纏い、両手に銃——そうはいつでも普通の銃ではなく、ロボットアニメに出てきそうな銃——を持った一人の青年。

先ほどの青白い閃光に唯一巻き込まれなかった誘拐犯がようやく我に返り、IS——^{うちがね}打鉄——を身に纏い、入ってきた青年に何か叫んだ。

当時の記憶が既にあやふやになっていることもあってか、何と言っていたのかは詳しく覚えていないが、「何者だ貴様、止まれ！」みたいなことを言っていたのだろう。

しかし、その青年は聞く耳を持っていないのかお構いなしに歩を進める。

それに激昂した誘拐犯は近接用ブレードを展開して青年に突撃した。

――ISに勝てるのはISだけ――

それがこの世界の一般常識だった。そしてそのISを扱えるのは女性のみ。この場面のみを誰かが見ていたのならその誰もがISを纏った女性が勝つと信じただろう。

だが、その予想は大きく外れることになる。

その青年は右手に持っていた銃を誘拐犯に向ける。その銃口には青白い光が集まっていた。

もしこの時、誘拐犯が冷静な判断ができていれば結果は違っていた

のかもしれない。その銃口に集まっている光の色が自分の仲間を吹き飛ばした青白い閃光と同じ色であったことに気づき、とつさに回避していればあんな一瞬で終了することはなかったのかもしれない。

「考えもなく怒り狂って突っ込んでくるのは頭の悪い奴がやることだ。」

青年は呆れた口調でそう言い、銃の引き金を引いた。

その瞬間、銃口に集まっていた青白い光は誘拐犯に向かって解き放たれ、その言葉通りISごと誘拐犯を呑み込み、反対側の壁を打ち抜いて吹き飛ばした。

「やばっ、出力抑えたはずなのに……またなのはに怒られるな。」

青年の顔はやりすぎたといった表情をしながらも俺のそばにやって来る。

「ちょっと動くなよ。」

そう言いながら銃口から放出される青白い光をナイフのような形に固定して俺を縛っていたロープを切断。そして俺の頭に手を乗せてこう言った。

「一人でよく頑張ったな、もう大丈夫だ。」

たった一言。けどその一言が俺の心にため込んでいた何かを一気に放出させた。少年は助けしてくれた青年にしがみついて泣いた。ただ、ただ泣き続けた。

数年後、あの時どうして泣いていたのかを聞いてみると少年は恥ずかしそうにこう言った。

「あの時の俺は、多分さびしかったんだと思います。」と。

どんなに頑張っても褒めてくれる人はいなかった。運動会で1位を取っても、テストで満点を取っても誰も褒めてくれず、「取れて当然」のような反応をされてきた。ずっと姉と比較され続けてきた。だけど、ただ一人の家族である姉のため、とひたすら我慢してきた。だけど、本当は褒めてほしかった、一緒に喜んでほしかった。たった一言でいいから「頑張ったね」と言ってくれしかった。

しばらくたって俺は落ち着きを取り戻し、そしてサイレンの音が鳴っているのに気付いた。その音はだんだん大きくなっていることからこちらに向かっているのだらうと簡単に予想できた。先ほどの爆発音を聞いて黙っている人の方が少ない。

俺を助けてくれた青年は周りの状況を理解しているのか「巻き込まれたら面倒だからさっさと帰るか」と言って去ろうとしていた。そんな彼の手をいつの間にか俺は掴んでこう言った「俺も連れて行ってください」と。

いきなり手をつかまれた彼は最初は困惑していたが、俺の目をじっと見てこういった。

「俺が進んでいる道は険しくてつらい。それでもついてくる覚悟が君にはあるか？」

俺は彼のその眼を見て彼がその言葉の通り今まで非常に厳しくつらい経験を踏んで来たのだらうと感じた。その中には悲しい別れもたくさんあったのだらう。もし彼と同じ道を進めば俺も同じ経験をすることになるのかもしれない。だけど俺はこの世界を自分の目で自分の肌で自分の身で知りたいと思った。たとえどんな悲しい経験をしたとしても俺は知りたいと思った。

だから俺は「はい」と言って掴んだ手をギュッと握りなおした。

少年は「魔法」と出会い、自分が生きてきた世界の、そして両親失
踪の本当の真実を知る。

自分の世界に潜む闇を知り少年はどう思うのか。

物語はこの事件の3年後、この世界に再び少年が戻ってきたところ
から始まる。

胸に抱くは不屈の心、その手に持つは魔導の力。

愛機と共に立ち向かうは女性にしか扱う事の出来ない兵器、インフ
イニット・ストラトス。

魔導戦記リリカルなのはStratos

青年との偶然の出会いが少年の運命を拓き、少年―高町一夏―は空
を駆ける。

第1話「出会い」（後書き）

ご意見や誤字脱字等の指摘がありましたら感想の方をお願いします。

オリジナルキャラクター（以降、オリキャラ）はできる限り第1話に出てきた謎の青年以外には出さないように進めていく予定です。

（オリキャラを出しすぎると読みにくくなりそうなので…）

第2話「入学」

世界で初めて男としてISを起動させてしまったことによりIS学園への入学を強制される一夏。IS学園への入学は一夏にとって吉となるのか凶となるのか。

第2話「入学」（前書き）

お待たせしました、記念すべき連載第2話です。

今回の物語はISの世界を軸として、その世界になのはのメンバーが関与していくといった話にする予定です。

第2話では、なのはの主要メンバーがほんのちょっとだけ出てくる
…かも。

第2話「入学」

「（…いくらセシルが同じクラスにいるからってこの状況はさすがにきつい。）」

俺以外のクラス全員…というよりもこの学園に通う生徒は俺以外全員女子生徒。学園職員も用務員に成りすましている本当の学園長を除いて全員女性。それに加えて座席が最前列と真ん中というクラスほぼ全員からの視線を集める絶好の位置。まさに四面楚歌。

「（藍越学園で学生をしながらこの世界の状況について調べてくるのが今回の俺の任務の目的だったのに、よりによって座標ミスって転送位置がズレただけじゃなく、飛ばされた場所に置いてあったISに触れて起動させちゃうなんてな…マジで情けない）」

ちなみにそのことをみんなに話したら「いやいやさすがにそれはないでしょ」って顔された。太一さんとタヌキ（はやて）さんについては大爆笑。

俺はあの時ほど「穴があったら入りたい」と思ったことはない。

「（しかもそのせいで世界で初めてISを動かした男という立場からISを調べてこいってという追加任務まで課せられるなんて…鬱だ。）」

「はあっ」と大きなため息をつく。しかし、何事も前向きに考えるという持ち前の性格ですぐさま気持ちをあらため、この3年間で習得した並列処理を活かして現時点で発生している問題とその解決策について考えていく。

「（まあ、起きてしまったことはしょうがないとしてこれからどうするかだな。国籍についてはイギリス政府の努力もあつて自由国籍権を取得できたけど今後どうするかを考えていけないといけない。ISの情報収集についてはこの学園に入学したことで藍越学園にいる場合よりも洗練された情報が入手できる、ISがどうして俺に反応したのかについては実際にISに乗って調べてみないとわからない、それから俺の機体は…）」

並列処理は一般的な魔導師で3つか4つ程度しかできない。これは人間の脳が与えられた情報を処理する能力に限界があるためだが、一夏はそれを最大15個まで並行して考えることが出来る。現在並行して考えている情報は10個、あと5つ考えることが出来る点を考慮すれば脳への負荷はそれ程大きくはない。だが一夏は8個以上の情報を並行して考える時、脳への負荷を小さくしようとして思考のみに意識を集中させてしまうという癖があつた。

だからだろう、教室に副担任が入ってきて自己紹介したのにも、クラスメイトの自己紹介が始まったのにも気づかなかつたのは…

「…ちかくん、高町一夏くんっ」

「へっ、あっはい。」

下に向けていた顔を上にあげると副担任の：確か山田先生（下の名前は忘れた）が机の前まで来て俺の名前を呼んでいること、そしてまたいつもの悪い癖が出ていたことに気付く。どうやら自己紹介が始まっていて俺の順番まで進んできていたらしい。セシルの方をチラリと見ると「またですか、もう。」といった顔をしている。

「あっあの、お、大声出しちゃってゴメンね。お、怒ってる？怒ってるかな？ゴメンね、本当にゴメンね！でもね、あのね、自己紹介が、『あ』から始まって今『た』の高町くんの番なんだよね。だからね、ご、ゴメンね？自己紹介してくれるかな？それともやっぱり、ダメかな？」

目の前で山田先生が今にも泣きそうな声で頭をぺこぺこ下げてお願いしていた。

「あ、ちょっと考え事していただけなので怒ってませんし、そんなに謝らないでください。自己紹介もちやんとしますから、先生落착いてください。」

「ほ、本当？本当ですか？本当ですね？や、約束ですよ。絶対ですよ！」

…本当にこの人は教師なのだろうか、という疑問を持ちながらも一夏は立ち上がり、後ろを振り向く。今まで背中に感じていた視線を今度は正面から浴びる格好。

「（なのは姉も教導の際にこんな感じでいろんな視線を浴びてたんだな…）」

自分の義姉のなのはが教導官として多くの魔導師の前に立った際に浴びる視線に近いものを自分も浴びていることに気付き、一瞬しみじみとした思いになりながらも気持ちを引き締めてこう言った。

「初めまして、イチカ・タカマチです。日本生まれのイギリス人でしたが、現在は様々な国の思惑のせいで自由国籍権を取得し、所属は決まっていない状況にあります。変に馴れ馴れしく接すると国際問題になりかねないのでその点にはみなさん注意してください。」

第2話「入学」（後書き）

ということで第2話でした。いかがだったでしょうか。これからもコツコツと話を進めていく予定ですので、今後も宜しく願います。

ご意見、ご感想、誤字・脱字等につきましては感想の方をお願いします。

次回、第3話「再会」

一夏はこの学園で会いたくなかった人と3年ぶりの再会を果たす。

第3話「再会」(前書き)

現在第4話＋主要人物紹介を鋭意執筆中。

主要人物紹介はおそらく一夏が筈と話をした後くらいになるかと思っています。

では本編の方へ。

第3話「再会」

Side 一夏

自己紹介を終えた瞬間、自分の頭めがけてナニカが振り下ろされることに気付いた。自己紹介中に誰かが前のドアから教室に入ってきたのには気づいていたから、その誰かが俺に対してナニカを振り下ろしているのだろう。

「（…山田先生じゃないな。）」

山田先生は俺の左の方で「た、高町くん、その、そういう自己紹介だと、お、お友達、できないよ。もうちょっと、じ、自分の趣味とか、と、特技とか話してくれないかな？」みたいな表情をしてこっちを見ているからだ。

そんなことを考えている間にも俺の頭に近づいてくるナニカ。そしてそれが頭に直撃する寸前、そのナニカは山田先生の顔の前を通り過ぎ、教室のドアにぶつかった。一夏はそれが何であるのかを横目でちらりと確認すると薄い長方形の形をしたものであることを確認した。蹴り飛ばした時に感触からあれが出席簿だろうと推測。そして再び視線を前に向けると、そこには二度と会いたくもなかった人物が立っていた。

Side out

S i d e セシル

「（先ほどのシーンはみなさんの目にはどのように映ったのでしょうか…おそらく、黒板に背中を向けていた一夏さんがいつの間にかこちらに背を向けていて、担任と思われる人の手にあった出席簿がこれまたいつの間にか教室のドアにたたきつけられていた程度の認識しかできていないのでしょうけれど。）」

頭に振り下ろされていた出席簿を一瞬で蹴り飛ばした一夏の姿を見ながらセシルはそのようなことを考えた。その一連の動作が完了するまでにかかった時間は1秒にも満たない僅かなものであったからだ。その様子をただ見ていただだけのクラスメイトのほとんどはセシルの考えているようにしか先ほどのシーンを認識できていないことは間違いない。

「（それとほんの僅かではありましたが、一夏さん、魔法を使用したみたいですね。使用した魔法は身体強化と出席簿を蹴り飛ばした右足の加速…といったところでしょう。こちらは後ほど一夏さんに確認をすることにしましても…自らの姉だった方が担任になるなんて、一夏さんにとっては大変いやでしょうね。もちろん私が一夏さんの立場でもこちらからお断りしたいほどいやですけど。）」

セシルはそんなことを考えながらも一夏と彼の目の前に立っている教師をジッと見る。二人とも無言ではあるが、一夏の目が相手を射殺すかのような目をしていることにセシルは気付いた。そして次の瞬間、一夏の口が動いた。

S i d e o u t

S i d e 一夏

この学園で教師をしていることは知っていた。だが、自分の担任になるとは思っていなかった。その教師の本来の担当学年は3年であり、そしてこの学園の教師の担当学年が変更になったことは今までにないということとを事前調査で確認していたからである。

「（…俺という男性操縦者イレギュラーとそれによって発生する可能性の高い俺を巻き込んだ事件に対して迅速に対応できるだけの判断力や実力を持った教師を選んだということか。やっぱりあの用務員がくえんちよう、ただ者じゃないな。となると、頼りなさそうな感じではあるけど山田先生も相当の実力の持ち主ってことになる。」

顔には出していないが、今までに得られていた情報とは異なる事実に一夏は内心、驚いていた。しかし、すぐさま気持ちを切り替え、そこから得られる情報や考えられる可能性について導き出していく。そして、そのようなことを考えながらも一夏はこう思っていた。

「（…しかしまあ、よくも何事もなかったかのような顔をして俺の前に立てるな。）」

そう、目の前に立つのは3年前、家族の命よりも自らの肩書・栄誉を優先した人間かそくだうたひと、織斑千冬だった。そのような人を前にして一夏は

こう言った。

「いきなり、しかも後ろからあんなものを無防備な生徒の頭めがけて振り下ろすなんて、教師としてなってないんじゃないんですかブリュンヒルデ、いや織斑先生。」

S i d e o u t

3年前の誘拐事件から約3年、2人の姉弟は再会を果たした。姉であつた千冬にとっては嬉しい再会だつた。何せ3年間行方の掴めなかつた弟が今、目の前に立っているのだから。

しかし、弟であつた一夏にとっては二度と会うことはないと思つていただけのことであつてか最悪の再会であつた。

第3話「再会」（後書き）

3年ぶりの再会は感動の再会：にはなりませんでした。出来る限り原作に忠実に、しかしオリジナルティーを加え原作とは違ったストーリーで物語を進めています。が、「もっとこうしてほしい。」「こういった展開が見たい」といったご意見がありましたら感想の方へよろしくおねがいします。

第4話「真実」

イギリス国籍だった一夏が自由国籍権を取得せざるを得なかった理由、そして皆が知らなかった一夏誘拐事件の真実の一端が今、明らかになる。

第4話「真実」(前書き)

3年ぶりの再会：本来であれば嬉しいもののはずなのに、その再会
は彼―高町一夏―にとっては非常に不快なものだった。

魔導戦記リリカルなのはS t r a t o S 第4話「真実」、始まり
ます。

第4話「真実」

「いきなり、しかも後ろからあんなものを無防備な生徒の頭めがけて振り下ろすなんて、教師としてなってないんじゃないんですかブリュンヒルデ、いや織斑先生。」

二人の3年ぶりの再会で初めて交わされた言葉は感動的なものではなく…

「…それはお前の自己紹介の内容に問題があったからだ、織斑。」

そしてその言葉に返された返事もまた冷たいものだった。

「問題…ねえ。ですが俺が言ったことは事実でしょう？ISを起動させてしまった時の俺の国籍はイギリス国籍だった。だからイギリス政府は俺をイギリスの代表候補生の一人としてこの学園に入学させることにした。だけど、いきなり日本政府が『彼はイギリス国籍を有しているかもしれないが、日本で生まれ、今までの人生の半分以上を日本で過ごしている。その点を考慮するならば彼の所属は日本にあるべきだ。』って主張した。」

「…」

「そして、日本政府のその発言を発端にアメリカやロシアなどの諸外国が何かと理由をつけて俺を自国の所属にしようとした。『敗戦国の日本の復興に大きく貢献した我が国は日本に大きな貸しがあるならその貸しを彼の所属権を我が国に引き渡すことでチャラにしようじゃないか』とか言ってる。完全に俺はモノ扱いだ。」

「えっ…そ、そんな…」

「事実ですよ、山田先生…話を戻します、各国の首脳は俺の所属を巡って意味のない議論を繰り返した。連日、夜遅くまで…ね。」

「『…』」

一夏の口から出てくる自分たちの知らなかった事実、セシルを除く学生達はただ黙って聞くことしかできなかった。

「ただどこから議論しても解決策が出てこないことに一部の国々（所属権を主張しなかった国）の首脳たちが不満を持ち始め、そしてついに爆発した。『私たちは一体何のためにここに集められたのか』ってね。結局この不毛な争いはイギリス政府が『ならば彼に自由国籍権を与え、IS学園に通う3年間で様々な国の生徒と交流して、どの国に所属するのかを決めさせればよい。』と提案し、それを首脳たちが満場一致で賛成したことによってようやく解決した。もちろんその提案に不満を持っていた国もあったみたいだけど、それ以上に解決策も見えず、時間だけがただ過ぎていくことに不満を持

つていた首脳たちの方が多かったから、認めざるを得なかったんだけどな…それと織斑先生、俺のファミリーネームはオリムラじゃなくてタカマチです。」

自らの自由国籍権取得の本当の真実を話し終えた一夏は、最後に織斑千冬が口にした間違いを訂正した。

「っ…いや、お前が何と言おうとお前は織斑一夏であり、私の…弟だ。」

その事実にくラスがざわついた

「え……？高町くんが、あの行方不明になってた千冬様の…織斑先生の弟？」

「それじゃあ、ISに乗れるのもそれが関係してるってこと？けど、今の名字が『高町』になってるのは何か理由があるの…？」

教室中に飛び交う様々な憶測、そしてその内容のほとんどが一夏と千冬の関係について。この二人の関係が良好なものであれば、教室中に飛び交う内容など特に気にするようなものではない。しかし、今の一夏にとってその話題は苦痛以外の何物でもなかった。

彼はあの事件の時、実の姉だった人と決別すると心に決めた。「たった一人の家族」と言いながら助けに来なかった人を尊敬できる姉と見ることはもうできなかった。

だからこそ一夏は片手を机にバンツと叩きつけ、クラスを黙らせてからこう言った。

「『私の弟』だつて……？笑わせるなよ。あんたが、俺の……俺の姉であるものか！3年前のモンド・グロツソの決勝戦の時、俺の命よりも自らの栄誉を……肩書きを選んだ、あんたを姉……いや、家族だなんて認められるかよ！」

そう言い残し、一夏は教室から出ていった。この時間は本来授業時間なのだが、彼の口から発せられた驚愕の事実、彼の行動を止めようとする者はだれ一人としていなかった。

第4話「真実」（後書き）

以上、第4話でした。

まえがきを見て『あれっ?』と思われた方もいるでしょうが、4話以降の本編の前書きはこの形で統一していると思っております。余裕があれば1〜3話の前書きについても訂正していく予定です。それでは今回の話はこれで。

第5話「相棒」

屋上で一人、考え事をする一夏。そんな彼のもとに彼の相棒パートナーであり、良きライバルである彼女が訪れる。

登場人物紹介 その1（前書き）

タイトル通りの登場人物紹介です。

ここでは今までに出てきた主要（と思われる）人達の現時点までで分かっている情報が載っています。

キャラクターによっては原作とは異なる設定になっているので、読んでいただかれた方がこの物語を理解しやすくなると思います。

登場人物紹介 その1

高町一夏：一応、本作の主人公（のはず）。旧姓織斑。12歳の時に開催されていた第2回IS世界大会「モンド・グロツソ」の決勝戦直前、織斑千冬の2連覇を妨害しようとした他国の者に誘拐されるが、とある青年によって助けられ、魔導師としての道を進むことを決意する。本来はイギリスからの留学生として藍越学園に通いながらISに関する情報を集め、報告するのが今回の任務であったが、偶然ISに触れて起動させてしまったため、『世界で初めて男性としてISを起動させた人物』としてIS学園への入学を強制される。一般魔導師でも4つ程度しかできない並列処理を最大15個まで出来るという技能を持っているが、8個以上の情報を処理する場合は思考に意識を集中させてしまう癖がある。ベル力式を扱う空戦A-ランクの魔導師で階級は1等空士。弟の命よりも自らの栄誉を選んだ実の姉であった織斑千冬やISを世に出し女尊男卑という歪んだ世界を作った白騎士事件の犯人、篠ノ之束を嫌っている。

セシル：第2話から登場。今までの話の内容から一夏と知り合いである可能性が高い。また、一夏が出席簿を蹴り飛ばした時に魔力が発せられたことに気付いたり、使用した魔法の種類を瞬時に判断したことから、魔導師として高い素質を持っていると判断できる。

織斑千冬：一夏の姉だった人物であり、クラスの担任。第2回モンド・グロツソ決勝直前、一夏が誘拐されたことを知るが、「助けに行くのは試合を一瞬で決めてからでも遅くはない」と考え、決勝戦に出場。しかし、決勝戦の対戦相手が自分の戦い方をかなり研究してきたこともあってか、決勝戦は予想以上に手間取り、一夏の

救出に向かうのが遅くなってしまう。現場に着いた時にはそこに一夏の姿はすでになく、どうしてあの時あんな安易な考えをしてしまったのかと後悔する。そして大会後、一夏がいないという事実から目を背けるために一夏誘拐の情報を提供してくれたドイツへ1年間、教官として出向く。そしてその2年後、一夏がISを起動させたことによつて一夏が生きているということを知り、安堵し喜んだが、彼から「あんたが俺の姉であるものか」と拒絶されてしまう。

山田先生：一夏のクラスの副担任。下の名前は真耶^{まや}。

一夏を助けた青年：双銃使いの謎の青年。一撃でISを倒すことが出来るほどの実力の持ち主であり、「なのは」と呼ばれる人とは何やら良い関係にあるらしい。

高町なのは：一夏の義姉。例の青年と何やらいい関係にあるらしい。彼女の両親が一夏を養子として引き取ったことで一夏から「なのは姉」と呼ばれている。

太一：第2話で名前だけ出てきた人物。一夏がISを起動させたことを聞いて大爆笑した人物の一人。

タヌキ：別名「はやて」。太一と同じく、2話に名前だけ登場。ノリとツツコミをモットーに生きている人間の姿をした愛嬌？のあるタヌキと。女性の胸をもむのが日課で、本人いわく「スキンシップ」らしいが、どこからどう見てもセクハラにしか見えない。謎の青年

いわく「ヒト科タヌキ属セクハラ種」の珍人類。

登場人物紹介 その1（後書き）

…どうも人じゃなさそうなのが1人？混じっているようでしたが、それについてはあまり気にしないでください。

本編や番外編についても現在執筆中です。ご意見・ご感想お待ちしております。

第5話「相棒」(前書き)

掲載2日目にして累計PVが15000、そしてお気に入り登録数が50を突破しました。この小説を読んでもださっている皆様、本当にありがとうございます。作者杉並、より一層努力していく所存ですので、これからもよろしくお願いします。

それでは本編スタート。

大空を眺めながら一夏は一人考え事をする。そんな彼の前に現れたのは、この世界で生まれ育ち、彼と同じく魔導師の道を歩む女の子だった。

魔導戦記リリカルなのはStratos 第5話「相棒」、始まります。

第5話「相棒」

場所は変わってES学園の校舎の屋上、教室から出て行った一夏は屋上に設置してある長椅子に一人、寝そべっていた。休憩時間：特に昼休みであれば数人の生徒を見かける屋上も今がまだ授業時間であるため、彼以外の生徒を見かけることはない。

「（…飛び方は違うけど、あの人もなのは姉も俺の前に広がる青い大空を自由に飛び回って、同じような景色を見ていた。なのにどうしてこんなにも二人は違うんだろうか…）」

目の前に広がる大空を眺めながら考えているのは二人の女性。一人は血のつながった唯一の家族であり姉であつた織斑千冬。

——家族の命よりも名声を求めた女性おろかもの

そしてもう一人は、俺を助けてくれた人——鎖藤太一さんの恋人で、俺を養子として暖かく迎えてくれた高町家の次女、高町なのは。

——姉としても、そして同じ魔導師としても尊敬できる強くて優しい女性ひと。

ちなみに、一夏が太一の家ではなく高町家に家族として迎え入れら

れたのは、太一の家族（両親）がすでに他界していたためであった。それでも太一は家族として迎え入れる予定だったのだが、なのはの両親である高町士郎、高町桃子の二人が「彼に必要なのは親の愛情」と主張し、それを太一も認めたため、一夏は高町家の養子となった。それに加えて、高町家の家族構成が一般の家庭と少し違っていたことも関係していたりするらしい。

「（…俺も同じようにこの空を飛んで世界を見た時、この世界は俺の目にどんな風に映るんだろうか。）」

ISがこの世にその姿を現した時、この世界は変わった。特にこの世界に住んでいる人々の考えが大きく『歪んだ』。

たとえどんなにその人が優秀でなかったとしても、ただ「女性」であるという理由だけで厚遇され、どんなに優秀であったとしてもただ「男性」であるという理由だけで冷遇され、虐げられる世界になつてしまった。

——ISが女性にしか使えないことによつて…

そんな歪んだ世界の中に発生した俺というIS操縦者^{イレギュラー}。

ISの登場によつて虐げられ続けてきた男性^{おとこたち}にとっては俺は男性の地位回復に対する一縷の希望、優遇されてきた女性^{おんなたち}にとっては現在

の地位を揺るがす脅威であり、排除すべき存在。そして一部の者にとっては観察対象であり、IS世界大会2連覇という偉業を成し遂げた織斑千冬^{ブリコンヒルデ}の弟という存在…

「（俺がどう動き、どの陣営に所属するかによってこの世界が再び変わる可能性は極めて大きい。…まあ、一番最後の選択は何があっても選ぶことはないけどな。）」

そう考えながら一夏は左手につけている時計を見て時間を確認する。現在9時50分、2コマ連続での同一授業を採用しているこの学園の2時限目の授業がもう少して終了する何とも際どい時間帯。3・4時限の授業もサボろうかなどと考えたりもしたが、一夏は今回の任務が「学生をしながら」であることを思い出し、次の授業は最低限のマナーとして、出席だけはしようと決めた。

太一さんやタヌキさんなら「学生の本分はその生活を楽しむことにあり、その楽しみ方には授業を抜け出してこっそり学食に行ったり、昼寝してて授業をすっばかすといったものが含まれていて当然である。」などという自論を持ち出しかねないけど…

しかし、授業終了まではあと20分、そして次の授業まであと40分もある。授業終了と同時に教室に入ってもいいが、それから20分何をして過ごせばいいかわからない。廊下から好奇の目で見続けられるのも精神的に辛い。それならいっそ授業開始ぎりぎりまでここで空でも眺めているかなどと一夏が考えていると…

「…こんなところにいましたのね。」

屋上に一人の生徒がやってきて一夏に話しかけてきた。

この学園に通う生徒で一夏が知っているのは二人。一人は太一さん
経由で知り合ったイギリス人の女の子、そしてもう一人は…とある
人物を思い出してしまうため深くは考えないでおこう。そして現在、
一夏に話しかけてきたのは前者。自分と同じ魔導師の道を歩み、代
表候補生という立場からISについて調査することになっている、
俺の良きライバルであり良き相棒…
パートナー

「セシル…いや、ここではセシリアと呼んだ方がいいのかな。」

そこに立っていたのはイギリスの代表候補生、セシリア・オルコッ
ト・グレアムであった。

第5話「相棒」（後書き）

ここでもうやくセシリアが登場。読者の方も大方予想していたとは思いますが、セシルとセシリアでした。

しかし題名が「相棒」なのにセシリアの登場が最後のワンシーンだけというのは……この点については反省しております。

次回以降は題名と内容がかみ合ったものになるよう注意します。

第6話「意図」

久しぶりに再会を果たした一夏とセシリア。再会した二人は今回の任務が言われたような簡単なものではないことに気づき、その裏に隠されたものを考える。

第6話「意図」（前書き）

「魔導戦記リリカルなのはStratos」の連載開始から2日、累計PVが20000を超えました。

魔導戦記リリカルなのはStratosを読んでもくださった皆様、本当にありがとうございます。出来る限り早いペースで更新していく意気込みですのでこれからもよろしくお願いします。

それでは本編スタート。

久しぶりに再会を果たした一夏とセシリア。セシリアは任務を言い渡された時から思っていたある疑問を口にする。

魔導戦記リリカルなのはStratos 第6話「意図」、始まります。

第6話「意図」

「セシル…いや、ここではセシリアと呼んだ方がいいのかな。」

そこに立っていたのはイギリスの代表候補生、セシリア・オルコット・グレアムであった。

「今まで通り、セシルと呼んでいただいて構いませんわ、一夏さん。」

他人行儀ではなくいつも通りの接し方をセシリア…いやセシルは要求した。だから一夏もそれに応え、今まで通りセシルと呼ぶことにした。

「わかったよ。ところでセシル、今はまだ授業中のはずだけど、教室を抜け出してよかったのか？…まあ、一番最初に出て行った俺が言うのもおかしいかもしれないけどさ。」

「2時間目の授業は自習になりました。みなさんがあんな状態で授業を進めても何の意味もありませんからね。それと、一夏さんに聞きたいことがあったんですけど、出席簿を蹴り飛ばした際に魔法を使いましたよね。使用したのは身体強化と右足の加速といったところでしょうか。」

「やっぱり気付いてたか…使った魔法も言う通りだよ。やっぱりセシルはすごいな。」

「伊達に優秀な先生に鍛えられているわけではありません。ですが一夏さんの並列処理能力の高さも素晴らしいものだと思いますよ。最大15の情報処理できる方なんて管理局中探しても数えるくらいしかないでしょうし。」

「だけど、8個以上の情報を並列して処理すると思考に意識を集中させるトコが問題だな。太一さんからその癖を直すように言われているけど、そう簡単には直らない。自己紹介の時もそれが原因で山田先生が呼び掛けてたのに気づかなかったわけだし。」

「そうだろうと思いました。やっぱり、癖を修正するというのは難しいものですね…それはそうとして一夏さん、今回の任務ですが、おかしな点があると思いますか？」

セシルは知人の話で盛り上がりうろたえていた話を切って、今回言い渡された任務について一夏に問いかけた。彼女は何か思うところがあるらしい。

「おかしな点？任務の内容に関しては特別変なところはなかっただろ？俺もセシルも学生をしながらこの世界の状況…俺は世間の人々の考えを、セシルはISを操縦して得られる情報を集めて報告する。

特におかしいところはないじゃないか。」

「ええ、『任務の内容』については特に問題はありません。問題なのはその任務の中身つまり、重要度です。」

「重要度？」

「情報を集めるだけでしたら私たちではなく機械に詳しいデバイスマイスターやランクの低い局員、現地の調査員でも対応できたはずです。けれど今回の調査にはAランクの私達が選ばれた。とするとこの調査には何か裏があると踏んで間違いはないでしょう。」

展開されるセシルの自論。だが、彼女の自論は決して間違っているとはいえず、むしろそう考えるのが妥当であるかのように思われる。

「言われてみれば確かに任務の内容が軽すぎる。本局も地上本部もそんな簡単な任務にAランクの魔導師を二人も割けるほど人員に恵まれているわけじゃない…けど、どうして俺達なんだ？もしその考えが正しいとして、この任務の裏側に大きな事件が隠されてるのなら、現地出身という理由だけで俺達が選ばれたはずはない。」

「それは私も考えてはているのですが、答えが思いつかなくて…」

しばらく黙って考える二人。一夏はこんな時、太一さんやなのは姉が俺達の立場にいたのならどう考えるのだろうかと考えようとした時…

——ん、太一さん…？

そのワードが一夏の頭に引っかかり、そしてその答えを導き出した。

「セシリア、太一さんたちだ！俺達の知り合いには管理局でも数少ないAAAオーバーの魔導師や騎士の知り合いがたくさんいる。もし俺達だけで対処できなくなったとしたら、俺達を助けるためにみんなが動くとする。だから俺達なんだ。」

もしこの仮定が正しいものだとするなら、この任務はやはり簡単なものではなく、もしかしたら世界を…いや次元世界を巻き込んだ大事件に発展しかねないことに二人はここで気付いたのだった。

第6話「意図」（後書き）

もし一夏とセシリアの考えたものが真実であるとしたら、管理局はとんでもない組織ってことになります。作者は「なのは」のアニメは好きですけど、管理局の「優秀であれば10歳にも満たないような少年・少女達を戦場の中に放り込む」という考えは嫌いです。ですが、今回の話の都合上、管理局という組織についてはそのような立場に立つてもらうことを予定しています。

第7話「幼馴染」

導き出された答えに二人は恐怖し、警戒を怠らないことを決意する。そんな一夏の下に彼のもう一人の幼馴染が姿を現す。

第7話「幼馴染」(前書き)

あまりの出番のなさに腹を立てたタヌキはついに作者の夢の中にまで現れてやりたい放題… 皆さんもタヌキには十分注意しましょう(笑)

それでは本編をどうぞ。

たとえそれが推測の域を出なかったとしても警戒を怠らないことを決意する一夏とセシル。そしてセシルと別れた一夏の下に彼のもう一人の幼馴染が姿を現す。だが、彼女との会話で落ち着きを取り戻しつつあった一夏の心は再び乱されてしまう。

魔導戦記リリカルなのはStratos 第7話「幼馴染」、始まります。

第7話「幼馴染」

「私たちの考えが正しいものだとするならばこの任務は最悪の場合、この世界…いえ、次元世界を巻き込んだ事件に発展する可能性があります。ですが、確たる証拠がない現時点では、これはあくまでも私たちの推測でしかありません。」

そうセシリアが言った直後、2時間目の授業終了を知らせるチャイムが鳴る。

「だけど、警戒しておくに越したことはないだろう。特に俺というイレギュラーも発生してるわけだしな。」

「ええ、準備していたのとしていないのでは対応にかかる時間も大きく違いますし、お互いに気を付けていきましょう。何か気付いた点があれば連絡を、私も気づいた点があれば連絡いたしますので。…ではチャイムも鳴りましたし、私は教室に戻ります。一夏さん、3時間目からはきちんと授業に出てくださいね。」

「わかってるよ。サボりすぎたら何言われるかわかったもんじゃないしな。」

セシルは俺のその言葉を聞いてから俺に頭を下げて屋上を後にした。そして俺もセシルと話して気分も落ち着いたし、いい加減教室に戻

るかと思い、ドアに向かって歩き出そうとした時、閉まっていたドアが勝手に開いた。勿論、閉まっていたドアがひとりで開くなんてことはまずあり得ない。となると誰かが屋上にやってきたということになる。

最初はセシルかと思ったのだが、やってきた人はセシルではなかった。

「…」

やってきたのは一夏のもう一人の知り合いであり、ISを開発し、女尊男卑という歪んだ世界をつくりだした人《犯罪者》の妹…篠ノ之箒だった。彼女は俺の近くまで歩いてくると口を『へ』の字にし、腕を組んで動かなくなった。「何か私に言うことがあるだろう」とでも言いたげな顔をして。

だが、当の一夏はというと彼女に対して特に言うことなどなかった。もしいう言葉があるとすれば「黙って突っ立つなら端でしろ。通行の邪魔だ。」である。

「…」

依然として腕を組んで立つたまま動こうとしない箒…いや、指がトントンと動いていた。俺が何も言わないことに苛立っているのだろう。

「（…何も言うつもりがないなら目の前に立つなよ。それに時間の無駄だ。）」

だから一夏は何も言わずにただ立っているだけの彼女を置いて屋上を去ろうとした。だが、彼が彼女の隣を通り過ぎようとした瞬間、彼女に手をつかまれた。

「…6年ぶりに再会した幼馴染に一言も声をかけず、しかも黙って置いて行こうとするとは…見損なっただぞ、一夏。それに、千冬さんへのあの態度は何だ！3年ぶりに再会したのだろう、もつと違った言い方があったのではないのか？あと、私が屋上に来るときにすれ違ったあの女、一体誰だ！クラスメイトなのはわかる。しかし、そこが重要なのではない。一夏、あの女とはいったいどういう関係なのだ。それに名字もだ。なぜ『織斑』ではなく、『高町』になっているのだ？誘拐されてからの3年間にいったい何があったのだ！」

腕をつかんだかと思えば今度は罵声とともに矢継ぎ早に浴びせられる質問。そしてそれを聞いて湧き上がる彼女への怒り…

「一夏、私の質問を聞いてい」「うるせえっ！」「…っ」

我慢の限界だった。彼女は自分の都合しか考えていない、相手のことなんて一切考えていない…だから一夏はキレた。

「6年ぶりに再会がどうした！お前は俺が誘拐される前の3年間ですら、手紙も電話もメールも一切して来なかったじゃないか！出来なかったなんてのは言い訳だ。学校へ行く途中や政府の人の目を盗んで送ったり電話したりすることは出来たはずだからな。なのにお前はそれをしなかった。」

「そ、それは…」

「それに家族でもないお前が俺の名字…いや俺の家族のことや交友関係について口出する権利なんてない。お前は俺の家族でも保護者でもないんだ。ほつといてくれ！」

そう言い残し掴まれていた腕を振りほどき、一夏は屋上を去った。セシルと会話して落ち着きを取り戻していた一夏の気分は一人の少女の身勝手な振る舞いによって再び最悪な状態へと逆戻りしてしまった。

第7話「幼馴染」（後書き）

原作の一夏であれば自分から彼女に話しかけていましたが、本作では短い間であつても高町夫妻から愛情を注がれて育ったことや多くの人との触れ合いによつて一夏の性格に変化が生じたという設定としています。「出会いによつて人は変わる」ということは作者も経験してきたことなので、ご理解いただければと思っております。

第8話「条件」

クラス代表として名前の挙がるセシリア、だが彼女はクラス代表の役職を受け入れる条件として一夏との決闘を要求する。

登場人物紹介 その2（前書き）

その1に続いての登場人物紹介です。

今回はセシルと謎の青年（太一）の追加情報、そして現時点での篠ノ之姉妹の情報について載せています。

登場人物紹介 その2

セシリア・O・グレアム：イギリスの代表候補生。両親は優秀な魔導師だったが仲間をかばって死亡した。両親の死後は父の上司であったギル・グレアム（現在は退官）の養女となる。ミッド式空戦Aランクの優秀な魔導師であり階級は空曹。一夏の良きパートナーであり良きライバル。愛称はセシル。

篠ノ之箒：ISを発明した篠ノ之束の妹。世界で初めてISを起動させたとして高町一夏の写真がニュース番組映し出されたのを見て彼が第2回モンド・グロツソで行方不明になっている自分の初恋の人、織斑一夏であることに気付く。入学初日に6年前なぜいなくなったのか、なぜ名字を変えたのか、あの女は一体誰だなどと一夏に詰問するが、「家族でもないお前に俺の家族や交友関係について口出しされる理由なんてない」と一蹴されてしまう。

篠ノ之束：ISの発明者にして、本人の意思があつたかは定かではないが女尊男卑の世界を作った張本人

鎖藤太一：一夏を助けた青年であり、一夏がISを起動させたことを知り大爆笑した人。なのはの恋人で今年で2年目。去年までは高校に通いながら局勤めをしていたが、高校を卒業した今年から管理局に正式に入局。非常に優秀な魔導師であるが、手加減というものを知らないことで敵・味方問わず有名（本人としては抑えているらしい）。地上本部に籍を置いてはいるが、大規模犯罪が発生しない限り、基本的に3提督やレジアスの話し相手しかしていない。これ

は彼が非常に扱いにくいことに起因している。恋人のなのはが「本^う局^みの白い悪魔」と言われていることに対し、彼自身も「陸上^{おか}に住む地獄の番人」の異名を持つ。（タヌキ情報）

登場人物紹介 その2（後書き）

現在第8話の修正、それ以降の物語の考案・執筆中です。
最新話につきましてはもう少しお待ちください。

第8話「条件」（前書き）

）皆さんへのお知らせ）

連載から3日、累計PV数が5万、お気に入り登録数も150件を超えました。

「魔導戦記リリカルなのはStratos」を読んでいただいて本当にありがとうございます。

ご意見・ご感想がある方はお手数ですが「感想」欄にお願いします。質問につきましては回答可能な範囲内で、できる限り早くご返答していくつもりです。

それでは本編をどうぞ。第8話は今までの話よりも内容量が多くなっております。

クラス対抗戦の代表として推薦されたセシリア。彼女はその役職を受け入れるが、受け入れる条件として一夏との決闘を要求する。セシリアはなぜそのようなその条件を要求したのだろうか…

魔導戦記リリカルなのはStratos 第8話「条件」、始まります。

第8話「条件」

「——であるからして、ISの基本的な運用は現時点で国家の認証が必要であり、枠内を逸脱したIS運用をした場合は、刑法によって罰せられ——」

すらすらと教科書を読み上げていく山田先生。

時間は進んで4時間目。3・4時間目の座学はISの運用に関する基本的な知識について。これは入学前に配られた参考書に書かれていたことであり、誰もが覚えているはずの内容であるため、手を挙げて質問する生徒など一人もいるはずがない。

滞りなく進む授業。しかし、その授業が行われているその教室の空気は明らかに異質だった。多くの生徒が手を動かしておらず、ただじっと座っていた。恐らくは何をしたらいいのかわからないのだろう。

憧れだった織斑千冬のモンド・グロツソ2連覇の裏側に隠された真実……それを知った彼女たちは当初、その真実を認めようとはしなかった。事実なのかを確認しようにもその当事者である織斑千冬が自習を言い渡して以降教室に戻ってきていないため、確認することもできない。だが、彼——高町一夏——の怒り方が普通ではないことを考えると真実であつたと認めざるを得ない。

沈黙…それが教室を支配していた。頑張って授業をしていた山田先生もさすがにどうにかしなければと思い、進めていた授業を切りがよいところで中断する。

「えっと…そ、その…み、みなさん。気分転換…というわけじゃないですけど、授業はここで中断して今から再来週に行われるクラス対抗戦の代表を決めませんか？このままの状態ですら授業を進めても皆さんあまり、集中できていませんし。今ここで決めるのが嫌な人って…いるかな？いたら手をあげたり首を横に振ってほしいな。」

話題を学校行事に変え、意思表示をさせることで生徒のモチベーションを上げようと努力する。そして、話題変更に反対する生徒がいないことを確認して山田先生は話を進める。

「いない、みたいです。ではそのまま話を進めていきますね。クラス代表者とはクラス長とおなじものだと考えてもらって結構です。クラス対抗戦だけでなく、生徒会の開く会議や委員会への出席といった仕事も引き受けていただくことになります。代表者は自薦でも他薦でも構いませんが、代表に選ばれると原則として代表が変わることはないのです、このクラスの中でだれが適任かをしっかりと考えて代表者を決めていきましょう。ちなみに、今回の対抗選で優勝すれば、食堂のデザートフリーパス券がクラス全員に渡されます。去年は半年だったんですけど、今年は1年間のフリーパスになります。」

「山田先生、それは本当ですか？」

沈黙が支配していた雰囲気の中、山田先生の授業を真面目に受けていた数少ない生徒の一人の鷹月さんがその言葉に反応する。

「ええ、職員会議で学園長がおっしゃっていたので間違いありませんよ。」

「それならグレアムさんを推薦します。グレアムさんは代表候補生なので、実力については申し分ないと思います。」

「おー、鷹っちはセツシーを選んだか。私としては大穴の高やんもいいと思ったけど、ここは私もセツシーを推薦〜。」

鷹月さんがセシルを代表に推薦。そしてそれに追随するように本音も「高やん」なる謎の人物の名をあげながらもセシルを推薦した。彼女は花より団子を選んだ。

「えっと、グレアムさんがクラス代表の候補者として推薦されていますが、他に誰かいませんか？自薦でも構いませんよ。」

ここでもう一度山田先生はクラス全員にほかに立候補者はいないのかを確認した。一夏の方を見て手を上げようかどうか悩んでいた生

徒中中にはいたが、手は上がらなかったため、山田先生はセシルに確認を取った。

「グレアムさん、クラス代表の候補者が現時点でグレアムさん以外にいないので、グレアムさんにクラス代表を引き受けて欲しいんだけど、それでいいかな？」

「ええ、クラス代表の役職を引き受けることには私は何も異存はありません。ですが、その役職を引き受ける代わりをお願いしたいことがひとつあります。」

「お願い…ですか。学園側で準備できることや叶えられるものであれば、大丈夫だとは思いますが…グレアムさん、そのお願いっていったいなんですか？」

「クラス対抗戦までに一夏さんとI.S.による試合をさせて下さい。」

セシリアの要求は情報や金銭といったものではなく、一夏との試合というこのクラスの誰もが予測しなかったことだった。

故にクラスがざわついた。

「た、高町くんとのお試合…ですか！それは、アリーナと使用許可さ

え出てくれば出来ないことはないとは思いますが…高町くん
機体の問題があるので、私の一存で決めることはできません。お昼
休みの間に学園長に確認を取るので、返事はそれからでもいいです
か？」

「はい、構いません。」

「わかりました。返事はできる限り早くするようにしますね。です
が、グレアムさん、どうして高町くんとの試合を要求したんですか
？試合をしたいのだったら、高町くんを推薦すればよかった話なの
に…」

「おっしゃられる通り、機体の問題はありませんが、私が一夏さんを
推薦すれば私と彼の間で試合が行われるのはおそらく間違いないで
しょう。ですが、その試合に私が負けてしまった場合、機体の稼働
データの収集という候補生の仕事の一つを十分に果たせなくなつて
しまいます。卑怯な手段だと思われる方がいらつしやるかもしれま
せんが、私はイギリスの代表の一人としてこの学園に通っている以
上、私に課せられた職務はすべて果たさなければならぬのです。」

「おおっつ、セツシーかつこいい。」

「布仏さん、光荣です。」

本音がぱちぱちと両手をたたいて褒めたのに対してセシルもお辞儀をして返す。セシルがこのような考えを持っていたことに一夏を含めたクラス全員が驚き、彼女と自分の意識の差を…責任感の差を感じる。だが、セシルが最後にこう付け加えたことによってイギリス出身以外の生徒はその戦いの重要性によりやく気付き、そして後悔することになる。

「それに、光栄だとは思いませんか？男性として世界で初めてISを起動させた方と実戦に近い形で一番最初に戦うことが出来るのですから。」

第8話「条件」（後書き）

本作において彼女・セシル・は「策士」という言葉が当てはまるようなキャラとして行動してもらおうと思っています。専用機に自立起動兵器が搭載されているのであればそのような思考を持っているもおかしくはないというのが（あくまでも）私の考えにあるので。また、一夏のヒロインですが複数ではなく一人に絞ります。ただし、なのはの登場人物がヒロインになることはありません。ISに出てきた人物の誰かがヒロインになります。

第9話「束の間の休息」

一夏は昼食の時、セシルが申し出た自分との試合に隠された別の意味を知る。

と言いながらも次回は番外編を入れる予定なので、第9話の更新はそのあとになります。

side story第1話「任務に隠された真実」(前書き)

本作はISサイドをメインストーリーで、管理局サイドをサイドストーリーでその二つに含まれない話(おもに過去の話)を番外編と定義して物語を進めていきます。

side story第1話「任務に隠された真実」

局員の学力不足に悩む管理局のトップたち。学力不足が局員のデスクワークの効率、部隊内におけるコミュニケーション能力の低下を招いていた。それを打開すべく彼らは二人の少年少女にとある任務を言い渡す。しかしその真意を知らない一部の局員は、彼らの任務内容に疑問を持っていた。

リリカルなのはStratos side story第1話「任務に隠された真実」

一夏の知らない太一とタヌキの中学生生活の真実がほんの少しだけ明らかになる。

side story第1話「任務に隠された真実」

新暦74年4月、場所は時空管理局ミッドチルダ地上本部にあるとある部屋――

その部屋では男性の三人と、栗色と金色の髪の二人の女性、そして服を着たタヌキ一匹が椅子に座ってお茶をしていた。

「あつちの時間だと入学式も終わって、授業が始まってるくらいかな…任務もそうだけど真面目に授業は受けてるかな、一夏。」

栗色の髪をした女性、一夏の義姉の高町なのはは部屋にかけられた時計を見てそう言った。

「多分大丈夫だろう。中学の時、本当に授業を抜け出して食堂にカツ丼食べに行ったそのタヌキと比べてあいつはまじめな方だからな。」

「な、何やと太一！太一だって何度も国語の授業サボって屋上で寝てたやないかつ！」

「あのジイさんの国語の授業は念仏だったからな。たとえ授業受けてたとしても寝てるだろう。というか、俺と同じようにあの授業で

寝てたお前に言われる筋合いはない。…しかもタヌキの耳とシツポ生やした状態で寝てるような奴に。」

「誰がタヌキやーっ！私は『キュート』な女の子や。タヌキの耳とかシツポなんてないっ！」

「ノリとツツコミをモットーに生きてるセクハラタヌキだろ。」

「ムキーツ、毎回毎回私のことをタヌキ呼ばわりして…」

四人の前で繰り広げられる太一とタヌキ？の激論。一夏のことを心配していたはずだったのにいつの間にか話の内容がタヌキのことになっていた。しかし、これは日常茶飯事。無視しておけばいつかは終わることを四人は知っているため、一人と一匹のことは無視する。

「あの二人はほっておこう、どうせすぐに終わるだろうからな…それはそうと、一夏とセシリアがついている今回の任務についてだが、みんなはどう思う？」

両肩にとげの付いた服を着た男性―クロノ・ハラオウン―が残りの三人に質問する。

「私は何か裏があるのかなって思う。だって、Aランクの二人に任

せる任務にしては内容があまりにも軽すぎるものだから。」

その問いに対して一番最初に答えたのは彼の妹であるフェイト・Ｔ・ハラオウン。彼女の意見はセシリアが考えていたものと一緒であった。だが、その意見にもう一人の男性「ヴェロツサ・アコース」が疑問を呈する。

「確かに内容としては軽いものだね。だけど仮に、二人の任務に何か別の意図が隠されていて、それが次元世界を巻き込んだ大規模犯罪であったとしてだよ、それを彼ら二人で解決できると君は思うかい？」

「えっ…そ、それは…」

「無理だろうな。あの世界には一応、グレアム元提督、それにロツテにアリアがいるとはいえ、大規模次元犯罪をそれだけの戦力で解決できるはずはない。となると何を目的に二人が選ばれたかがわからないな…」

ヴェロツサの疑問にフェイトはすぐに答えを出すことが出来なかったが、クロノはそれをすぐに否定する。だがそうするとやはりなぜ彼らなのかという疑問が残る。

ちなみにあの一人と一匹は、どうやら「あっち向いてホイ」で今回

の決着をつけているらしい…あ、タヌキが負けた。

「今日のタヌキはなかなか手強かったな…それはそうとクロ助、四人で何の話してるんだ？」

orz↑こんな恰好をしているタヌキをほっという太一がクロノたちの会話に入ってくる。

「まったく、君というやつは…今話しているのはどうしてあの二人が情報収集という簡単な任務に就いているのかだ。このような任務は魔力を持たない調査員でもできる簡単な内容だ。となると裏があると考えるのが妥当だが、それが何か全くわからない。君はレジアス中将をはじめとする地上本部のトップたちから何か聞いていないか？」

「ああ、一夏とセシルの任務ことか。」

「太一君…君は何か知っているのかい？」

クロノの質問に太一はさらりと答える。その答えに部屋の端で「の」の字を書いているタヌキ以外の四人は疑問を持ち、ヴェロッサが代表して太一に質問を返した。

「レジアスのおっさん曰く「現地の情報は現地に住んでいた、もしくは現在もそこに住んでいる局員や囑託にやらせた方がより厳選された情報が入ってくる」とのこと。それに、任務内容に『学生をしながら』って記述されてる点を考えると、『低年齢化による局員の学力低下の改善』ってのも考えてるんじゃないか？最近、メディアで取り上げられてかなり叩かれてたことだし。俺は一応、高校卒業してから正式入隊したけど、なのはたちは中卒、ナカジマ三佐の娘は12歳で陸士学校に入隊してるんじゃないかな？陸士学校でも座学はやるけど、陸士学校は1年で卒業だから、学力の向上はあまり期待できない。そこで今回、あの二人を任務の一つとして高校に通わせ、学力をつけさせることにする。学力の向上によってデスクワークのスピードが上がったり、対外交渉で今までよりも良い成果が上がれば、それが管理局員の新しい選定基準になる。今回あの二人が選ばれたのは「二人が現地出身であること」と「本来ならば高校に通う年齢であること」の二つだろう。」

考えもしなかった太一の答えに四人は驚いたが、クロノとヴェロックスはすぐさま理解する。

「今まで僕たちは『学校へ通い勉強する』ということを経験と考えるていなかった。だが、それが指令なら任務の内容は軽くない、むしろ重要であるといえる。」

「それに、メディアが叩いてきた管理局の課題の一つも消えるわけだから、一石二鳥…ということになるね。」

「ただ面倒なのは、一夏とセシルが任務についてクロ助たちと同じように深読みしすぎてないかな。多分、任務を言い渡した上司もその意図に気づいてないだろうし、セシルはかなり頭が切れるから…否定はできない。」

「「「…」」」

解決した…と思った矢先にまた発生する問題。一夏たちが深読みする前に太一たちはそのことを伝えることはできるのだろうか…

side story第1話「任務に隠された真実」（後書き）

以上、side story第1話でした。

side storyや番外編は不定期更新になりますが、基本的に本編のキリが良いところで進めていく予定です。

サイドストーリーや番外編を更新する場合はその前の話のあとがきに必ず一言お知らせが入ります。

次回は本編に戻ります。

誤字脱字がありましたらお知らせください。勿論、感想も何かありましたら感想欄にお願いします。それでは。

補足説明（前書き）

感想に様々な疑問が挙げられましたので、最新話の更新の前に補足説明を入れさせていただきます。

補足説明

Q1・高町夫妻に育てられながらも一夏がやや子供っぽい点について

一夏は約3年間、高町夫妻の愛情を受けながら育ちましたが、彼の心を成長させたのは高町夫妻だけではありません。兄や姉、彼が通った学校で出会った友達や仲間、そしてフェイトやはやてなどの姉の友人との出会いも彼の成長に影響を与えています。

たとえ同じ人に育てられたとしても、出会った人、その人と出会った時期が異なれば性格も異なるのは仕方のないことです。また一夏の年齢上、周りの影響によって正確に変化が出てくる時期でもあるので、そこまでおかしくはないと私は思います。

一夏が教室で怒ったり、箒にキレるシーンにつきましては、もしあの場面において千冬が3年前の自らの行為を謝罪していたのであれば、箒がもう少し一夏のことを考えて発言していれば、クラスの雰囲気や彼女らの関係が悪くなることはなかったでしょう。しかし、この物語において二人とも自らの行為の非を謝ったり認めることなく、自分の主張ばかりしたり、その主張を相手に押し付けたりしています。

どんなに一夏が精神的に大人になってきているとしても、そのような人を前にしたとき、常に冷静でいられるでしょうか。私達ですらあまりできないことを小説の登場人物だけではできるといえるのはいささか都合がよすぎる気がします。

Q2・エリオと一夏の境遇は似ているがなぜ呼応まで性格が異なるのか

これはあくまでも私の考えですが、一夏とエリオの境遇は似ているようで似ていません。

二人とも家族に裏切られてしまったという点は似ています。ですが、エリオは特殊な生まれ方をしながらも、両親の愛情を受けて育っていました。しかし一夏は両親の記憶がありません。

またエリオは研究者によって連れ出され、研究対象として施設に軟禁されていたところをフェイトに助けられました。一夏は研究対象にされていたわけでも、フェイトに助けられたわけでもありません。

Q3・姉への恨みについて

信頼関係というものは築き上げるのには非常に多くの時間を費やしますが、壊すのは一瞬でできてしまいます。どんなになのはたちがフォローしていたとしてもそう簡単に回復するものではありません。もし回復していたとしても3年ぶりに再会した姉が自分に対してあのような振る舞いをするのであればまた一瞬で壊れてしまいます。

Q4・「局員の学力低下は訓練期間を期間を延長することで解決できる」という指摘について

就学プログラムをつけたり訓練期間を延ばし、就学期間を延ばすという方法は確かに考えられます。ではなぜそれを管理局がしなかったのか、たとえばスバルとティアナの訓練校への入学とエリオの入隊の間には約3年の差が存在したのになぜ改善されていないのか。

改善されない理由には人員不足に悩む前線部隊の反発があると私は考えます。

訓練期間を延ばせば確かに学力は向上するでしょう。しかし、伸ばした期間は新人が入ってこないため、多くの部隊は現行の人数で任務をこなさなければなりません。

そこにけがによる長期離脱や退職する人が出てくれば、その人たちの仕事も少ない人数でカバーしなければなりません。

期間を延ばせば学力低下をたたく人たちはいなくなるでしょう。しかし、それによって今度は人員不足によるミッドチルダの治安の低下が発生すれば今度はその点をメディアは叩くのです。

しかも、人材不足に悩む部隊に訓練期間延長を納得させるためには具体的な根拠、つまり実績が必要になります。しかし、その実績は管理局の中でもそれなりに知られているものでなければなりません。名も知らぬ局員であれば「もともと優秀だった人を使ったパフォーマンス」と評価される可能性もあります。

一夏は幼いころから両親がおらず、比較的貧しい生活を送ってきました。しかし、彼は鎖藤太一という管理局でも有名な魔導師に保護され、高町なのはの両親の下で育てられたことから局の中、特に部隊長たちの間ではある程度は名前が知られています。

「貧しい家庭で育った彼は勉強することでここまで優秀になった」これは管理局にとって非常に効果のある宣伝になり、部隊長たちも

認めざるを得ない実績にもなるのです。

セシリアについては「優秀な人もさらに努力すればよりよい結果が出せる」という意味合いがあると考えてください。

補足説明（後書き）

以上を補足説明とさせていただきます。

今後もし質問がありましたら回答いたしますので、疑問点がありましたら感想欄までお願いします。

第9話「束の間の休息」(前書き)

皆さんへのお知らせ

本編とは関係ありませんが、とある件につきましてお伝えしたいことがありますので私のユーザページにあります活動報告欄にも目を通してください。よろしく願います。

ユーザページへは「小説情報」↓「作者名」で進むことができます。

それでは本編に入ります。

一夏は昼食の時、セシルが申し出た自分との試合に隠された別の意味を知る。その意味とはいったい何なのであるつか。

魔導戦記リリカルなのはStratos 第9話「束の間の休息」、
始まります。

第9話「束の間の休息」

「…ところでセシル、さっきの発言のことだけど、何か別に目的があるだろ？」

場所は変わって食堂。一夏はセシルと食堂で昼食をとっていた。食べているものは一夏がスパゲッティとサラダ、セシリアが日本食…どこにどう突っ込んでいいのかわからない。

「別の目的と申しますと？」

「代表戦前に俺と戦う理由って言った方がいいのかな、それは代表候補生としての職務を果たすことと世界で最初に俺と戦えるってことだけじゃないだろ？」

「一夏さんはなぜそう思ったのですか？」

「世界で最初に俺と戦えるって発言をしたときのセシルの目だな。」

「目…ですか。」

「ああ。あの時のセシルの目は「この試合にはそんな意味も隠され

「ている」というよりもむしろ「それとは別の目的もある」と言っているように俺には見えただ。山田先生やクラスメイトがあの時俺と同じ考えを持っていたのかや実際にセシルがそう思っていたのかはわからないけど、俺にはそんな風に見えた。」

「…」

持っていた箸を丁寧に置き、黙り込むセシル。俺たち二人の様子を見ていた生徒たちも「いきなりどうしたのだろっ」といった表情をしている。だが、そんなことを俺は気にすることはない。俺が知りたいのはセシルが何か別の目的を隠しているのではないかということだけ。

セシルはそれからしばらくは黙ったままであったが、ついに口を開いた。

「集中しすぎると周りが見えなくなってしまうのに、一夏さんはどうしてそのような些細なことには非常に鋭いのでしょうか。」

「つまり、俺の考えはアタリってことでいいんだな。」

「一夏さんがおっしゃっていた通り、あの試合にはまだ別の目的があります。その一つが男性が操縦するISと戦う場合と女性が操縦するISと戦う場合では得られる情報がどのように異なってくるの

か。そしてもう一つが一夏さんがISを動かすことによって得られる情報を収集することです。」

「前者については分かるけど、俺がISを動かすことによって得られる情報の収集は俺がする仕事だろ？セシルがする必要はないはずだぜ。」

「ええ、その内容については一夏さんが調べるべきものです。就是一夏さん、もしここで戦わなかった場合、次に戦うのはいつになるでしょうか。」

「それは…」

「行事予定に変更がなければ学年別トーナメントとなります。授業において飛行訓練や模擬戦を行うことはあるでしょうが、最初は基本動作の確認がメインになるはずですので、そこまで進むのにはしばらく時間がかかります。となりますと、一夏さんが得られる情報が少なくなってしまうませんか？」

「言われてみればそうだな。」

「ほぼ間違いなく通るとは思いますけれど、私の申し出が通って試合することが決まり、こちらも可能性は非常に高いことですが、一夏さんが専用機を受領されることになれば放課後や休日を使って

訓練したり模擬戦をすることが可能になるため、多くの情報を集めることが可能となります。」

「試合の別の目的については理解できたけど、セシルはどうして試合の開催や俺への専用機の受領がほぼ間違いなくあると断言できるんだ？」

「それは簡単です。各国のトップの方々は一夏さんの……いえ、男性が操縦するISに関する情報を欲しがっているからです。しかも一夏さんはその一人目。各国から自国の専用機をぜひ使って欲しいという申し出は必ずあるでしょう。自国のISを使っただけであればそれが国の宣伝にもなりますし、他国を引き離す材料にもなりますから。」

この言葉を聞いて一夏はセシルの先読みの能力を改めて「すごい」と感じるのだった。

第9話「束の間の休息」（後書き）

深読みしすぎる点が玉にきずはありますが、本小説でセシルはかなり活躍するよていです。福音戦は白紙からのスタートとなっておりますが、対ゴーレム戦や対ラウラ戦ではきつといい活躍をしてくれる…はず。

第10話「専用機」

セシルの申し出は彼女の予想通り許可され、そしてその試合に臨む一夏には学園側から専用機が与えられることが伝えられる。

それから、こちらは私の都合で非常に申し訳ないのですが、お正月が明けて大学が再開しましたので、更新ペースが最初よりも遅くなります。最低でも1日に1回は更新していく予定ですが、読者の皆様、更新ペースが遅くなってしまう点につきましては大変申し訳ありません。

ご意見ご感想がありましたら感想欄へご記入お願いします。

第10話「専用機」(前書き)

読者の皆様へ

「魔導戦記リリカルなのはStratos」を読んでいただいて本当にありがとうございます。おかげさまでお気に入り登録数が250件を超えました。今後も精進していくつもりですのでこれ下もよろしく願います。

午後の授業に入る前、セシルと一夏の試合の許可、そして一夏への専用機の受領をクラスにようやく戻ってきた千冬が言い渡す。

魔導戦記リリカルなのはStratos 第10話「専用機」、始まりです。

第10話「専用機」

昼食後、一夏とセシルが教室に戻ってくると午前中の授業に出てこなかった織斑千冬の姿があるのに気付いた。その姿は2時間目に現れた時とほとんど変わらず凜としたものであったが、心なしか彼女独自の威圧的なオーラがああの時に比べて小さくなっているように一夏は感じた。ちなみに山田先生は彼女の隣に控えめに立っている。

黙って立っていた千冬は午後の授業開始のチャイムが鳴ってから口を開いた。

「全員席に着いたようだ。午後の授業を始める前に皆に言っておかなければならないことがある。クラス代表を決める際にあったグレアムの申し出についてだが、学園長から先ほど許可が出たため、グレアムの要望通り、代表戦前にグレアムと高町の試合を行う……また、それに関した内容だが、高町の機体は学園側で準備をする。」

一夏に専用機が受領されることを聞き、ざわつくクラス。しかし、それを気にすることなく彼女は言葉をつづける。

「ただし、機体の受領は試合ギリギリになる可能性が高い。高町、試合までにISに慣れておきたい場合は、学園が所持している打鉄カリヴァイヴを利用して調整を行え。本来、機体やアーリーナ使用の申請は使用日の前日までに済ませておくことが規則なのだが、今回は特例だ。その日の午前中までに申請を出すなら、こちらで時間等

を調整して使用できるようにしておく。また、試合は来週の月曜日の放課後に行く。グレアム、高町、二人とも異存はないか？」

言わなければならないことを言い終わると千冬は俺とセシルの二人に質問があるかを尋ねる。

「試合についてはないです。けど、俺の機体の仕様はどのようになるんですか？近接メインの機体だったとしたらその手の武装の練習をしておきたいので。」

一夏は試合をするうえで重要である自分の専用機の特徴について質問した。試合までに残された準備期間は1週間程度しか残っていない。正直な話、そんな短い期間で習得できることは少なく、どちらかと言えば付け焼刃なものの方が多いことは一夏は十分に理解していた。だが、たとえ付け焼刃であったとしても、自分の機体の特徴にあった武器の特性を少しでも知っておくことは決して損にはならない。逆に自分の機体の特徴にあっていない武器の練習をした方が今回の試合に向けた準備に限った話をすれば得られるものは少ない。勿論、その経験は長い目で見ればよいものなのかもしれないが、今回は準備期間があまりにも短すぎるのだ。

「詳細についてはまだわかっていないが、近接がメインであることだけは間違いない。」

「わかりました。」

「グレアムは何か気になる点はないか。」

「そうですね…できれば今回の試合はほかのクラスの生徒の観戦は許可しないようにすることはできないでしょうか。」

「…理由を聞こうか。」

セシリアの提案に疑問を感じた千冬はなぜそのようなことをする必要があるのかをセシルに聞き返した。

「ほかのクラスの生徒の観戦が認められた場合、1年のクラスの代表の方々は必ずこの試合を見に来るでしょう。相手のクラス代表の機体に搭載されている武装がわかればクラス代表戦までにある程度対応策を考えることもできますから。もちろん、私は代表候補生です。その程度のことで後れを取るほど弱くはありませんが、4組には日本代表候補生の方もいらっしゃいますし、念には念を入れておこうと思ひまして。」

その理由がVTシステムに代表されるような国際的に禁止されているシステムや兵器を搭載しているからではないことを理解した千冬はこう返事をする。

「他学年の生徒については観戦制限を設けられるかはわからないが、1年については観戦制限をかけることにしよう。他学年の件については決まり次第また改めて報告する。ほかにはないか？」

「それ以外にはありません。」

「それならば双方とも試合に向けてしっかりと準備しておくように。それでは山田先生、授業の方を。」

「あ、はい。わかりました。みなさん、お昼を食べたばかりでちょっと眠いかもしれませんが、ここでもう一度気を引き締めて授業に集中してくださいね。それでは教科書の6ページを開いてください——」

1組の午後の授業は二人の試合の決定や一夏の専用機受領などの報告を経てようやくスタートしたのだった。

第10話「専用機」（後書き）

一夏の専用機につきましては完全オリジナル機体にするかそれとも白式のままで行くか非常に悩んでいます。それによってはストーリーも変わってくる可能性があるので、決定は慎重に行いたいと思います。

第11話「ルームメイト」

放課後、アリーナと量産機の貸し出し申請をした一夏は山田先生から寮の鍵を渡される。彼の同居人とはいったい誰なのか。

第11話「ルームメイト」(前書き)

放課後、アリーナと量産機の貸し出し申請をした一夏は山田先生から寮の鍵を渡される。しばらくの間はホテルから通学するはずだったのだが、いきなりの変更に疑問を覚える一夏。いきなりの変更の理由は何か、そして彼の同居人とはいったい誰なのか。

魔導戦記リリカルなのはStratos 第11話「ルームメイト」
、始まります。

第11話「ルームメイト」

授業が終わった後、一夏はすぐに職員室に向かい、機体とアリーナ使用の申請を行った。ISに関する知識に言えば、一夏はほかの生徒に劣らないだけのものを持っているが、彼のISの操縦時間はこの学園に通う生徒の中でもダントツに短く、一桁有るか無いか程度である。そのため試合前日ギリギリまで毎日ISを使って基本動作の確認や武器コルの呼び出しの練習を行うつもりだったのだが、日曜日のアリーナの使用が認められないことや一夏よりも前にアリーナや機体使用の申請を出している生徒がいたことを聞いて、申請はまず3日間だけ申請を出すことにした。残りの日については後日、アリーナや機体申請の混雑状況を見ながら行うことにした。

申請後、カバンを持たずに職員室に来ていたことに気付き、一夏は教室に戻った。教室に戻り、必要なものをカバンの中に入れている途中で山田先生が教室に入ってきた。

「ああ、高町くん。教室に戻っていたんですね。さっきまで職員室でアリーナ利用の申請書を書いていたのにいきなりいなくなっていたので探しましたよ。」

「山田先生、何か俺に用事があるんですか？」

「えっとですね、寮の部屋が決まったので、その部屋の鍵を高町くんに渡しに来ました。」

そう言って山田先生は手に持った鍵を一夏に見せる。

「寮の部屋が決まったって……しばらくは日本政府が指定したホテルから通学するっていう話だったはずですけど。」

「そうなんですけど、指定したホテルから通わせるよりも学園内から出さない方が高町くんの安全を確保しやすいということで、一時的な処置として部屋割りを無理やり変更したらいいんです。私達のところにもさつきその連絡が入ってきたので、急いで高町くんを探していたんですよ。」

「そうだったんですか、ありがとうございます。」

「いえ、私は高町くんのクラスの副担任ですから。……まあ、そういうわけで日本政府の命令もあってとにかく寮に入れるのを優先したみたいです。今のところは相部屋になるんですけど、1ヶ月もすれば個室の準備ができると思いますから、それまでは我慢してくださいね。」

山田先生はそういいながら部屋の鍵を渡した。その後、食事の時間帯をはじめとする寮の規則などを聞いたのち、一夏は渡された鍵に書かれている部屋がある寮へと向かった。

「…あつ、ルームメイトが誰か聞き忘れてた。」

その途中で一夏は大切なことを聞いていないことに気付く。しかし、もう目の前に寮が見えており、ここからまた職員室まで戻り、同居人が誰か聞くのは時間がもったいない。

「（…まあ、なんとかなるだろ。今までだって部屋は違っただけ美由希姉やなのは姉たちと一緒に暮らしてきたんだし。）」

寮の前でしばらく悩んだが、やってしまったことはやってしまったことと割り切り、一夏は寮に入り、割り振られた部屋へと向かった。

一夏は部屋の鍵を開ける前に中にルームメイトがいるのかを確認するためにドアをノックする。これは一夏が高町家で生活してきた中で自然と身に着けたものだった。義母の桃子さんから風呂に入るように言われて脱衣所に行ったら、バスタオルで体を隠しただけの美由希姉やなのは姉、そして恭弥さんの彼女である忍さんと遭遇したことがあったからだ。

このような出来事が発生するたびに太一さんからは「ラッキースケベ」と言われ、恭也さんとは（一夏の）生死をかけた一方的な鬼ごっこをしたことはあまり思い出さなくてもない出来事である。この生死をかけた鬼ごっこは基本的に小太刀を持ち殺気を放つ恭也さんから逃げ続けるというものなのだが、遭遇相手が忍さんであった場合

に限っては恭也さんは飛針や鋼糸も使って追いかけてくるため、自分が向かう部屋に先に誰か入っていないかを確認せずにはいられなくなってしまったのだ。

「はい、どちら様でしょうか。」

ノックした後しばらくして中から返事があった。一夏はその声を聴いて少し安心をする。その声は一夏が信頼している相手の声だったからだ。

「俺だよ、セシル。」

「一夏さん…ですか？少々お待ちください。」

その言葉とともにロックが外され、ドアが開いた。そこには制服を着たセシルの姿があった。

「一夏さん、どういったご用件でこの部屋に…？もう、ホテルの方に戻られていたのではないのですか？」

一夏はセシルにあらかじめ自分がしばらくホテル通学になることは伝えていた。だからこのような質問が来るのは当然のことであった。

「本当はホテルからの通学だったんだけど、日本政府が部屋割りを無理矢理変更して俺を寮に入れたんだって。で、その部屋がココ。これからしばらく相部屋になるけど、よろしくな、セシル。」

第11話「ルームメイト」(後書き)

ご意見・ご感想、お待ちしております。

一夏の機体、本当にどうしようか悩んでいます。一応、両方とも学年別トーナメントまでの物語の構成はある程度できているのですが、臨海学校あたりからの流れが非常に難しいです。ただし、ここ数日中には決定すると思いますので、もうしばらくお待ち下さい。

第12話「通信」

部屋に入った一夏はセシルと同じ部屋で生活していく上での注意事項を確認し、今日までに集めた情報などを報告書にまとめて送信しようとする。しかしそんな時、二人に連絡をつないできた者がいた。

第12話「通信」(前書き)

一夏の同居人はセシルであった。二人は以前も同じ部屋で生活したことがあったため、この部屋で生活していく上での注意事項はすぐに決まった。そして今日までに集めた情報などを報告書にまとめて送信しようとする。そんな時、二人に連絡をつないできた者がいた。

魔導戦記リリカルなのはStratos 第12話「通信」、始まります。

第12話「通信」

「…なるほど。つまり今回の変更は一夏さんの安全確保のための行動ということですね。」

「山田先生はそう言ってたな。それから個室の準備が終わるのに1ヶ月ぐらいかかるらしいから、それまでセシリアに色んなところで迷惑かけることになるけど、それまでの間はよろしくな。」

「何を言っているのですか一夏さん、相部屋になるのはこれが3回目ですよ。2年前の夏と冬に一緒に受けました短期訓練プログラムをお忘れになりましたか？」

「ああ、そういえば、あの時期にそのプログラムを受けるのが俺とセシルしかいなかったから相部屋になったんだっけ？ すっかり忘れてた。」

実はこの二人、同じ部屋で生活するのは今回が初めてではない。今までに2回、同じ部屋でしばらく生活していたことがあった。

1回目は二人が中学2年の夏に受けた嘱託魔導師試験とその後に行われた短期訓練プログラムで約1か月半、2回目はその冬に2週間程度かけて行われたデスクワーク研修である。

管理局には常勤の魔導師のほかには非常勤勤務の嘱託魔導師も所属している。嘱託魔導師は、士官学校や訓練校とは異なり入局の時期は決まっていないため、希望して対応できる試験官がいればいつでも認定試験を受けることが出来るという利点がある。ただし、正規局員ではないため、悪いというわけではないが、どうしても正規局員と比べると待遇は良くはない。局員があまり行きたがらない本局から遠い世界での任務なども重大な事件ではない限り、まず最初に嘱託魔導師に頼み、その人たちが断った場合、正規局員が出向くことが多い。そのこともあつてか嘱託として働こうというものは多くない。しかし、嘱託であつてもしっかりとした成果を残しているのであれば、その後に正規局員として入局した際も、好条件で入局できることも多い。

一夏を助けた太一はこの時期はまだ非常勤の嘱託魔導師として管理局に勤務していた。彼は今年正式に局員として入局したのだが、嘱託として多くの成果を残してきたこともあり、入局1年目から特別捜査官（武装隊では准佐扱い）という高待遇を得ている。

もちろん、本人の魔導師レベルや局員からの推薦（正規・非正規は問わないが実績や肩書がある者に限定される）なども考慮された形であるので、魔導師レベルによつては待遇は変わってくる。太一の場合はクロノ、リンディ、そしてなぜかレジアスから推薦を受けたことが大きい。

「もう、すっかりしてください。コホン……ともかく、約2カ月間一緒に生活してきたこともあったのですから、一夏さんの生活習慣につきましてはある程度理解しているつもりです。思い出したのであればあの時に決めたルールも思い出しておりますわよね。」

「シャワーや就寝時間とかで良かったか？」

「ええ、覚えているのでしたら今回もあのルールを適用しませんか？」

「新しいルール決めても俺は1ヶ月で部屋が変わるわけだし、それがいいな。ところでさセル、きょう提出の報告書ってもう書き上げた？」

「いえ、まだですわ。一夏さんはもう済ませてしまっているのですか？」

「いや、俺もまだ。本当は午前中のうちにまとめておいて、ルームメイトがいないうちに送ろうかって思ってたんだけど、午後には報告しなきゃいけないことが増えたから、もう一回まとめなおしてから提出するつもりだよ。でも、ルームメイトがセルならこそそこそ隠れて送る必要はないよな。」

「ええ、それは私も同感です。ルームメイトの方がいらつしやらないときに急いでまとめたり送ったりする必要がありませんからね。」

「まあ、長話するのもいいけど、とりあえず先に報告書をさっさと

書いて送ろうぜ。積もる話はそれからでも遅くはないしさ。」

「そうですわね、ではさっさと終わらせてしまいましょう。」

そういつて二人は報告書を書くためにディスプレイやキーボードを展開しようとした時、一夏に通信が入った。

「ん？こんな時に連絡が入るなんて…いったい誰だ？」

そっついながらも一夏はその連絡をつないだ。

二人の前に一つのディスプレイが現れる。そしてそこにはある人物が映っていた。

「…おっ、繋がった繋がった。久しぶり、元気にしてるか一夏。」

その人は一夏を助けてくれた鎖藤太一であった。

第12話「通信」(後書き)

ここでもうやく管理局サイドと本編が繋がりました。…まあ、ほんの少しでしたが。以前、サイドストーリーに関するご指摘があったので、できる限りサイドストーリーは書かないように(重大な出来事があった場合や、管理局側で問題が発生した場合を除きます)して、本編に登場させていこうと思います。

第13話「心情」

入学1日目に、自分にあつた出来事を二人の人物が考える。どうしてこうなってしまったのかを…

→の予告からもわかるとおり、次回は回想回?になります。

第13話「心情（前編）」（前書き）

第13話ですが、二人分を1話でまとめていましたが、追加修正が多くなったため、前編・後編と分けることにしました。ですので2話同時アップとなっております。

入学1日目に、自分にあつた出来事を思い返している人たちがいた。どうしてこのような結果になってしまったのかと…

魔導戦記リリカルなのはStratos 第13話「心情（前編）」
、始まります。

第13話「心情（前編）」

3年前の世界大会決勝戦前に誘拐され、そのまま行方知れずになっていた一夏がISを起動させたという知らせを聞いた時、私は嬉しかった。

弟が生きていた……ただ、それだけが嬉しかった。しかし、実際にその姿を前にしてみると何と云っていいのかわからなかった。

だから以前のように厳しく接してしまった。「高町」などという名字は生きていくうえで仕方なく使っていたものだと思い、あんなことを言ってしまった。

しかし、よく考えてみれば、この世界は当時12歳だった一夏が3年もの間1人で生きていけるような世界ではない。一夏は女ではなく、『男』なのだから。

——あんたが俺の姉であるものか

教室で私の弟が言ったあの言葉が私の心に重くのしかかる。

元をたどれば私が3年前、決勝戦前に一夏が誘拐されたことを知りながらも決勝戦を優先したことが原因なのだ。

言い訳に聞こえるかもしれないが、本当はあの時―ドイツから一夏が誘拐されたという情報が入ってきた時―、決勝戦を放棄してでも私は一夏を助けにいきたかった。

しかし、それはできなかった。日本政府の者から止められたのもあったが、束から「これはちーちゃんのだ連覇を阻止するために決勝戦の相手の国が仕組んだバカなこと」と聞かされたからだ。

それを聞いた時、私は怒りに震えた。「これが世界を牽引してきた国がすることなのか」と。

だから私は決勝戦に出場することにした。「一瞬で沈めてそのまま助けに向かう」と心に決めて…

本当は大会本部にこの事実を伝え、試合を延期してもらえば良かっただけのことだったかもしれないのに、そんなことを考える余裕は私にはなかった。

私は愛機である「暮桜」を身に纏い、決勝会場へ向かった。ISを纏い、すでに会場に姿を見せていた相手は、私の姿を見て驚いていた。私が決勝を放棄して一夏を助けに行くだろうと高を括っていたのだろう。

――一瞬で片を付ける。容赦などしない

そう思い私は試合開始のブザーを待った。

しかし、物事というものは自分が考えているように上手くいくものではない。決勝の相手は私の戦い方をよく研究していた。踏み込み、回避、攻撃…私のパターンをかなり理解していた。私の登場に動揺しているとはいえ彼女もまた国家代表。その程度のことでは崩れるほどヤワではない。

相手に苦戦しながらも私は何とか相手を倒し、すぐさま現場へと向かった。私の行動に会場はザワついてしたが、そんなことを構っている暇はなかった。

現場についてまず一番に目に飛び込んできたものはポツカリと大きな穴が壁に空いた廃工場《一夏の監禁場所》だった。

それを見て私は嫌な予感しかしなかった。

そしてその予感は的中した。

その穴から廃工場に入ったが、そこに一夏の姿はなかった。ハイパーセンサーを使って探してもみたが、一夏を見つけることは出来なかった。

現場に倒れていた誘拐犯を叩き起こし、一夏の場所を聞き出そうとしたが、「青い閃光に包まれて気を失ったため、どこにいるのかわからない」としか言わなかった。

信じたくなかった。

唯一一夏の家族がいなくなってしまったことを信じたくなかった。自分の軽率な行動がこのようなことを引き起こしたということを信じたくなかった。

その後、私は情報を提供してくれた礼としてドイツへ教官として出向した。

いや、違うな。正しくは私はドイツへ逃げたのだ。日本にいと…あの家に一人でいると一夏のことを、私の犯した愚かな行為を思い出してしまうから。

一夏、どうすればお前は私のことを許してくれるのだ…

どうしたら…

寮の自室で悩む彼女―織斑千冬―のその内容に答えを提示する者はいない。

第13話「心情（前編）」（後書き）

予想されていた方もいたとは思いますが、一人は一夏の姉であった
織斑千冬でした。

次の話はもう一人の回想になります。

第14話「心情（後編）」（前書き）

2話連続更新です。早く一夏のセシルの試合を書き上げたい…と思っている作者です。そちらにつきましてはもう少しお待ちください。

今日の出来事を考えていたのは千冬だけではなかった。もう一人と
はいたい誰なのか。

魔導戦記リリカルなのはStratos 第14話「心情（後編）」
、始まります。

第14話「心情（後編）」

学園にまだ慣れていないこの時期、相手から一夏に声をかけることはあるだろうとは予想していた。何せ一夏は世界で唯一ISを扱える男性おとこなのだから。しかし、知らない人ばかりのこの学園で一夏から別の誰かに声をかけることはほとんどありえない。もし一夏から声をかけるとしても、その人物は自然と『一夏がよく知っている人物』に限られてくる。

入学前、私は新入生の名前を見て、私と一夏が通っていた小学校の生徒が私たち以外に誰もいないことを確認していた。

それを知って、『自分以外一夏から声をかけるような人はこの学園にはいない』と妙な自信を持ってしまうていた。そして、一夏が昔のあの優しい一夏のままであることを期待していた。

だが、実際に会った一夏は違った。3年ぶりに再会したはずの実の姉であるはずの千冬さんに一夏は喧嘩を売るような『いや、家族であることを拒絶するかのような口調で喋っていた。そんな一夏の姿を私は信じられなかった。

——あのような口調を一夏がするはずがない

私はそう思い、自習を言い渡された2時間目の授業を抜け出し、一

夏を探し、そして屋上で見つけた。

だが、一夏は一人ではなかった。一夏はクラスメイトの女子と話をしていた。

どちらから話しかけたのかは、最初からその様子を見ていたわけではなかったためわからなかったが、千冬さんに対する態度とは違い、その女と喋る一夏の様子は、表情はとても柔らかいものだった。一夏はその女と喋るのを楽しんでいるように見えた。その姿はまるで仲の良い友達と話すかのようなものだった。

—— 何だあの女は！なぜ一夏とそんなに親しく話をしている！

そんな思いが私を支配した。あの女が一夏と仲良く話しているのが許せなかった。だから私は一夏の目の前に立つても、自分から何も言おうとはしなかった。『幼馴染に自分から声をかけるのは当たり前だろう』というような顔をして黙ったまま立っていた。

だが最初に声をかけたのは私… いやあれは声をかけたという表現は正しくない。彼に罵声を浴びせたのは私だった。黙って立っていた私を置いて去ろうとした一夏を目の前にして我慢できなくなってしまった。

そんな私に… 自分勝手なことしか言わない私に一夏は怒った。6年

ぶりに再会した一夏の口から発せられた言葉は私が期待していた言葉とは大きく異なるものだった。

本当は私は一夏の口から「久しぶり」「会えてうれしかった」といった言葉が出てくるのを無意識のうちに期待していた。この6年間、私は一夏に対して何もしてこなかったというのに……だ。今、こうやって考えてみればあの場面では本来、私から声をかけるべきだった。なぜなら一夏が私を探していたわけではなく、私が一夏を探していたのだから。…なのに私はそれをしなかった。

誘拐されてから3年の間に一夏は大きく変わったように思えた。違う人になったような気がした。昔の面影は残っていなかった。

その逆に私は何も変わらなかった。3年もあれば人は変わることがあることくらい容易に考えられたはずなのに、私は昔の一夏をずっと引きずっていたせいで変わっていなかった。もし変わったところがあるとすればそれは身体的なところだけだろう。

名字のこと、国籍のこと、誘拐されてから3年間のこと…一夏に聞きたいことは今でもたくさんある。だけど、変わってしまった一夏にどう話しかけていいのかわからない。

「私は…どうしたらよいのだ…」

ルームメイトが食事に出て行っている中、彼女―篠ノ之箒―は一人、部屋の中で考え続けていた。

第14話「心情（後編）」（後書き）

もう一人は箒でした。千冬と箒、この二人は過去と向き合い、変わっていただけるのでしょうか。それによつては箒がヒロインになることもあり得る…かもしれない。

第15話「思い」

太一は二人に任務の本当の意味を話す。それを聞いた二人はこの任務をどう思ふのだろうか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2552ba/>

魔導戦記リリカルなのはStratoS

2012年1月13日21時49分発行